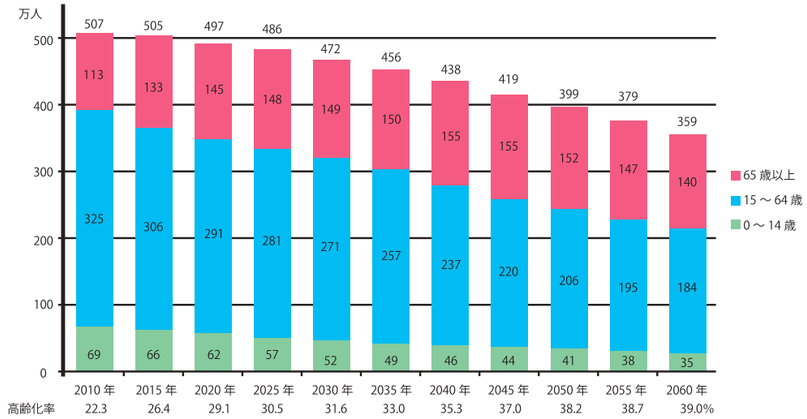
★ 少子高齢化について考えてみよう

子どもを持つこと、持たないことは、パートナーになる人との自由な選択に委ねられています。経済的または環境による理由等で持ちたくても持てない人もいます。あえて持たないという選択をする人もいますが、家族や地域社会に継続的に子どもが存在することは、家族の絆を強くすること、また地域社会に活力をもたらすことにつながります。
ここでは、私たちはもちろん、身近な人、地域の人たちにも影響を与えることとして「少子高齢化」について考えていきます。

●福岡県の将来人口推移



出典：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局「社人研推計準拠」（平成 26 年）

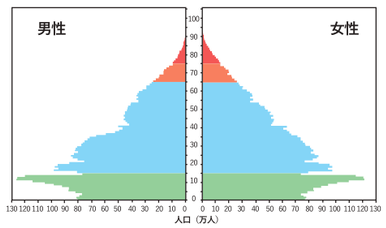
国立社会保障・人口問題研究所の推計方法に準拠すると、福岡県の将来人口は、2060 年には 359 万人になるとされています。年齢区分別では、年少人口（15 歳未満）、生産年齢人口（15 歳から 65 歳未満）の減少が大きく、老年人口（65 歳以上）も 2045 年頃まで増加したのち減少に転じます。人口減少は、後年になるほど加速し、現在より 3 割も少ない人口総数になると同時に、全人口に対して老年人口の占める割合を示す高齢化率も 4 割に近づくなど、その構造が大きく変容すると見込まれています。

●少子高齢化が地域や社会に与える影響

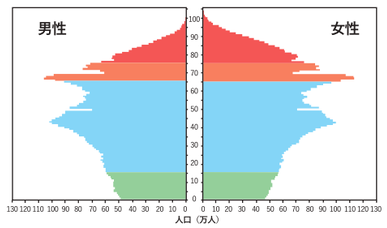
少子高齢化や人口減少が進むと、労働力の確保や持続的な社会保障制度、地域コミュニティの維持などにも影響を及ぼします。私たちの家族や私たちが年齢を重ね、また、私たちの子どもが大人になった時に豊かな社会環境であるためには、地域社会全体で少子化対策に取り組み、安心して子どもを生み育てられる環境づくりを行うということを考えていかねばなりません。

・人口構造の変化

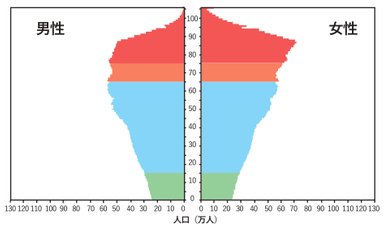
（1960 年）富士山型



（2015 年）釣鐘型



（2060 年）つぼ型



出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（出生中位推計）」（平成 24 年 1 月推計）

日本の人口の年齢構造を見ると、年少人口の減少と老年人口の増加が著しく、少子高齢化が急速に進んでいることが分かります。人口構造の変化を、いわゆる人口ピラミッドの変遷で見てみると、1960 年には、戦前からの「富士山型」であったものが、高齢化の進展により、二度のベビーブームによる凹凸はあるものの、現在では「釣鐘型」となっています。さらに、将来的に少子化が進めば「つぼ型」に変わっていくといわれています。

・社会保障の課題

公的年金制度は、おもに現役世代が高齢世代を支える世代間扶養の仕組みで成り立っています。しかしながら、平均寿命 の延びと出生数の減少により、年金制度の給付と負担のバランスの見直しが必要となっており、こうした社会構造の問題は、若者の将来に深く関わってきます。

・「ふるさと」の伝統文化の消滅の危機

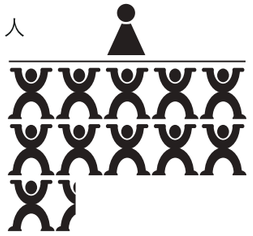
高齢化が進展すると、経済的・社会的な共同生活の維持が難しくなり、過疎化が進みます。これらの地域では、農作業 や冠婚葬祭、地域の祭事・伝統などを維持していくことが難しくなっていきます。

●現役世代 1.3 人で 1 人の高齢者を支える社会の到来

※65 歳以上人口を 15 ～ 64 歳人口で支える場合

・1 人の高齢世代を支える現役世代の比率

（1960 年）
1 人/11.2 人



（2015年）
1 人/2.3 人

（2060 年）
1 人/1.3 人

出典：内閣府「高齢社会白書」（平成 28 年）

考えてみよう !!

◆少子高齢化の原因は何だと思いますか。

◆少子高齢化の問題を解決するにはどんな対策が必要でしょうか。

◆少子高齢化に対するあなたの地域の取組について調べてまとめてみましょう。